東洋學 第83輯(2021年 4月) 檀國大學校 東洋學研究院

宮沢賢治の『四又の百合』の“百合”と“四”の探求

朴 京 娗*

要 旨

宮沢賢治の童話の特徴は、比喩表現、暗示、隠喩が多く、意外性に富み、宗教道徳性が強いことであり、鉱物学、植物生態学、天文学、自然科学など、多分野に渡る広範囲な知識を基にした作品構成がなされ、賢治特有の宗教観念が土台になっている。

本研究は、日蓮宗の法華経と深く縁があった作家である宮沢賢治の童話『四又の百合』の題名になっている“百合”と“四”に注目を置いた。『四又の百合』の登場人物である如来正偏知、王様と大臣、町の人々、林の子供を四種の存在とし、また、作品の舞台の設定から区切る時、如来正偏知がいる場所、如来正偏知を待つ人々がいる場所、その間に流れている川、子供がいる林の四つの空間があると見る。更に、この作品の百合の花びらの枚数“四”に潜む数理的神秘性の意味合いについて追求する。仏教色が濃厚なこの作品を通して、作者が現実の人間世界に創り出したい理想として描こうとしたものを、新しい角度から“百合と四”のキーワードによって考察する。

賢治の多くの童話において空間構造とは、現実と非現実の二構造で分けられる。『四又の百合』での現実世界は、王様の城や町に住む人々の日常生活であり、非現実世界は空想の世界で、如来の住む世界や子供の異空間である。物語は現実世界と非現実世界によって構成され、川を境に世界は対照的に分けられる。眼に見える有形世界の中で見えない無形世界と重なっている部分は子供の異空間の世界である。『四又の百合』に出てくる王城、川などの色々な場所が物理的空間であるとすると、仏教的な存在である如来のいる空間は多次元的な空間であると云える。2次元と3次元には、フィクションとノンフィクションの違いがある。2次元の世界は空想の世界であり、ファンタジー等の仮想世界である。3次元の世界は現実の世界であり人間や動物達が住んでいる事実の世界である。4次元の世界は生きた人が他界した死後の世界で霊界と呼ばれる無形世界である。2次元と3次元の世界、仏教的宇宙観での4次元の世界を複合した空間構造は王様や町の人々が住む陸地、境界線である川、如来正偏知のいる陸地とに区切られる。そこに子供が存在する林の重なる異空間が加わり四つとなる。王様がいる陸地の3次元世界と、正偏知のいる陸地の仏教的宇宙観による4次元世界はヒ-ムキャの河を間に行渡れる空間である。川の空間設定は、3次元の世界と4次元の世界を交差する役割を果している。『四又の百合』は、2次元の仮想世界と3次元の現実世界等の次元的な観点によって物理的な空間を区切って解釈できる。林の中では異次元の世界が存在する。林の中で同じ状況であっても子供と大臣のように、百合が見える人もいれば見えない人もいる。有形世界と無形世界が重なった精神的

* 檀國大學校 自由教養大學 講義專擔 助教授 / 12122346@dankook.ac.kr

な空間として区別できる。作品の中の如来がいる世界は、一般的にあの世と呼ばれる4次元世界であり、また、人間の空想による2次元世界でもある。3次元の世界は王様達がいる世界であり、その境目の川は複合世界、3次元の世界の中でも林は異次元の世界と重なった空間である。

子供がはだしであることは、境界線の存在、あの世の存在でもある可能性と、他の世界との繋がりを持つことを想像させる。仏教家門に生まれ法華経に帰依した賢治は、如来を信奉する自身を子供の姿に投影しているようである。百合のある林は、はだしの子供がいる空間として解釈し、子供が登場するその空間が多次元的なものを思わせる。林は異なる空間で、眼に見える空間と眼に見えない空間が二重に存在している。子供と大臣の違いが、百合が見えるか見えないかによって区別されることから二重構造が推測できる。

賢治の童話は、比喩表現が多く、二重構造なので、研究角度は多様に解釈でき、推測もできる。賢治童話の特徴と宗教との関連性、『四又の百合』の登場人物との関わり、賢治の思想と『四又の百合』の仏教意識、百合の役割と位置づけ、四又という単語を題目につけた賢治の意図等、“百合”に焦点を置いて、『四又の百合』の四又の空間構造、作品の舞台の設定から見られる“四”について研究した。

[キーワード] 百合、四又、四、仏教、空間

목 차

Ⅰ。はじめに
Ⅱ。賢治童話の特徴と宗教との関係
Ⅲ。『四又の百合』の登場人物との関わり
Ⅳ。『四又の百合』の“百合”とは
Ⅴ。『四又の百合』の空間構造からの“四”
Ⅵ。終わりに

Ⅰ。はじめに

日本人は意識するしないに関わらず、社会、文化、文学、芸術分野など、生活の中で仏教から計り知れない影響を受けていることは否定できない事実である。日本に伝来された仏教は、時代の流れと共に変化してきた。その歴史の中で日本の近代という時代は、激変する世界情勢の中、仏教との親密な関わりがあると云える。近代作家の一人である宮沢賢治は、法華文学とも呼ばれているように仏教の中でも日蓮宗の法華経と深く因縁があった作家である。

本研究は、宮沢賢治の童話の『四又の百合』の題名を作っている“百合”と“四”という言葉に注目した。日本仏教史の中でも、近代日本の仏教を背景とする宮沢賢治の思想と『四又の百合』に内在する仏教意識、従来の仏教説話に表われる百合と賢治の童話『四又の百合』の“四又”に着眼した。『四又の百合』の“四又”に着眼したのは、金剛経の経典に出てくる教えの集約である四句偈も根拠とする。

『四又の百合』の登場人物である如来正徧知[1)]、王様と大臣、町の人々、林の子供を四種類の存在と

し、また、作品の舞台の設定から区切る時、如来正偏知がいる場所、如来正偏知を待つ人々がいる場所、川、子供がいる林の四つの空間があると見る。更に、百合の花びらの枚数“四”に潜む数理的神秘性の意味合いについて追求する。

『四又の百合』は、他の賢治童話に比較すると未研究の部分が多い。賢治童話は、常に疑問を投げ掛ける傾向が強く、それなりに解釈、研究されているが、この作品は、研究の対象として追求する明らかな比喩表現や逆説、暗示技法などが少なく他作品に比べ取り扱いの難易度が高いと云える。本研究では、仏教色が濃厚なこの作品を通して、作者が現実の人間世界に創り出したい理想として描こうとしたものを、新しい角度から“百合”と“四”のキーワードによって考察する。

Ⅱ。賢治童話の特徴と宗教との関係

宮沢賢治の童話の特徴は、比喩表現、暗示、隠喩、意外性、宗教道徳性が見られることであり、鉱物学、植物生態学、天文学、自然科学など、多分野に渡る広範囲な知識を基にした作品構成がなされ、賢治特有の宗教観念は宗教性が土台になっている。また、時代背景を反映して反戦思想が現れている作品もある。

賢治童話の特徴であり魅力の一つとしてオノマトペを使い、読者に新鮮で刺激的印象を与えている。

> 風がサラサラ吹き木の葉は光りました。
> 「この風はもう九月の風だな。」[2)]

『四又の百合』でも、“風がサラサラ吹き木の葉は光りました”という表現から一般的に水に対して使われるサラサラという擬声語を賢治は風の表現として使っている。田守育啓は、ソヨソヨという風をイメージしている語彙を使わないことによって抽象性が欠ける可能性があると考え、三島由紀夫と井上ひさしの主張にも研究していている。その中で三島由紀夫は、本来の言葉の意味をそのまま使っていないので言葉を堕落させ、言葉としての力を無くす悪い影響を与えていると指摘する。反対に、井上ひさしは、賢治の独特の言葉の使い方が非常に文学を魅力的にしていると称讃している[3)]。

---

1) 正遍知は、仏陀、如来の称号の１つである。如来(仏)を指す次の呼称を如来十号といい，仏陀の優れた人格や能力を示している。如来、応供(阿羅漢)、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊という。但し、この中から如来を除き、仏世尊を仏と世尊に分けて十号とすることもある。中村 元外4人編、『仏教辞典』、岩波書店、2002．10．p．479.

2) 『全集』第十巻、p．100、本稿のテキスト引用は『校本宮沢賢治全集』第十巻、筑摩書房の原文を使用し、下線は理解の補助のため筆者が付加した。

3) 田守育啓、「宮沢賢治特有のオノマトペ－賢治独特の非慣習的用法－」、『人文論集』第46巻、兵庫県立大学神戸学園都

本研究者は、後者に賛同し、オノマトペが文学的効果を生み出し作品に独特の妙味を持たせる技法の一つであると見る。“風がサラサラ吹き”をみると、国語の教科書では“風がソヨソヨ”が正解であるが、あえて“サラサラ”が使われている。賢治は一般的に使用する単語を使っていない。サラサラという言葉は、読者が水が流れる様子をイメージしながら読む。川から気持ち良く、心地良い水音が聞こえるように感じさせ、風に対する表現の幅が広がっている。水音が聞こえるようなサラサラは、水のように風が流れる様子をイメージ化するようになる。面白く意外性があり読者に想像の機会を与えている。

四叉という単語を題目に使った賢治の目的を探る時、どこにでも見られる平凡な5枚の花びらの百合ではなく、4枚の花びらの百合は珍しいことから特別で貴重なものとして捉える意図が感じられる。また、他の部分からも特別な単語の使用によって、文学的効果を狙う内容が見られる。

「百合はもう咲いたか。」

「蕾はみんなできあがりましてございます。秋風の鋭い粉がその頂上の緑いろのかけ金を削って減してしまひます。今朝一斉にどの花も開くかと思はれます。」[4)]

上の文章には多様な意味合いが含まれていると思われる。9月の風と共に秋の粉は、鋭い粉、宝石のようである。粉は実際の粉なのか、光るので鋭い粉なのか、粉を光と風、光と風と共に飛んで来た木の葉っぱの粉としても解釈できる。秋の樹木や葉っぱの粉、風に乗せられてやって来た粉なのか、確かではない。自然現象を賢治なりに解釈して描写している。“緑いろのかけ金を削って”という表現で、緑のかけ金は何を意味しているのか、何かを比喩した表現であると思われる。風が光と共にやって来て、緑は木でできた山の緑、山のことを金具のようにピカピカ光っているため金具をかけたかけ金の意味とし、頂上が光っているのは、風と共にゆらゆらしているのを削っているように見えたのかも知れない。賢治の単語の使用が曖昧な表現なので幅広い解釈が出来る。賢治はこのような比喩表現によって、深遠な林に潜む百合に向かう過程を想像させるところにポイントを置いたと思われる。

百合の花びらが開く、その日の朝、王様の指示で大臣は百合を取りに行く。朝の状態では、全部つぼみであった。百合が咲く時を待機した後、咲いたばかりのその百合の花を子供から買おうとする。多くの百合が咲いた後の百合を摘まず、咲いたばかりの初めての百合なので、真心を象徴する。初めて、咲いたばかりの百合を捧げることは、特別なもっとも貴重なものを意味すると捉えられる。大臣には見えなかったが、清い存在である裸足の子供に見えた百合、この作品の百合の役割を強調しようとする賢治の意図があると考えられる。

賢治の童話は、心の世界が具象化した子供の登場に見られるように、仏教的概念を基にした賢治の宇宙観が表われている。賢治の作品を分析すると神仏の存在とシャーマニズムの融合する世界観がある。『四

市キャンパス学術研究会、2011. 3. pp. 15~30.

4)『全集』第十巻、p. 100.

又の百合』もこのような世界観が全般的に敷かれている。例えば、童話の始めの部分で如来正偏知の噂が“伝はった”の表現ではなく、“しみわたりました”と書かれてあるのは、如来正偏知の来訪という慶事が心の中に入ってきて留まったという意味であり、最初から最後まで単なる情報伝達の意味で正偏知が来るのではない。人々が心から如来正偏知を信奉し待ち望んでいる様子が現れている。

作者は執筆の最初から神仏の存在とシャーマニズムの融合する世界観で書いたと思われる。元々如来は目に見えない存在で、林の子供をどのように捉えるかによって違うが、仏教思想的な見方をすれば、世俗的な大臣が百合を探して行っても見えなかったが、探し続け最善を尽くした時に子供が見えてきて、心が研ぎ澄まされたところで天の世界が見え、百合を見つける。

> 唯心論的世界観から、唯心論は、心が中心になって、仏教全体の思想で、無形の世界を認め、それを肯定する考え方が有神論無形の世界を認める考え方である。有神論は、『四又の百合』で如来の登場の前提から、認める。[5)]

近代科学は、科学的に証明できないことは存在しないという思想であるが、賢治は科学的に証明できないシャーマニズムを大きく受け入れながらも、科学とも共存している。賢治の童話では科学を基礎とする記述も見られるが、『四又の百合』では科学的なことは一切登場していないことから矛盾していると解釈することもできる。

『四又の百合』は、歴史上の事実であるとは証明できないが、理解しやすい文章で書かれた説話のようで、解説が必要な詩や短歌のような文学作品とは距離がある。宇宙を自分の中に見ることが賢治の世界であり、そこから生まれた賢治の童話観は、現実世界と対峙するもう一つの世界を創造している印象を『四又の百合』の子供から受ける。子供の登場から理想世界を描き出して、子供の目線から現実世界と対峙しようとした。

川の向うの世界と現実世界、そして子供がいる異世界は、物語の中に存在する特別な仕組みである。子供の登場、河の岸の向うの如来の世界は、現実しか分からない人にとっては、ある意味で世界観の変換とも云える。現象を受け入れるそのものが世界観の変換、つまり唯物的世界像を唯心的に変革するその目標を果たすというのも理解できる。賢治が目指している世界は、有神論的世界観の認識を基に、王様がいる世界に如来が来て、新しいより良い世界を造ろうとする、善なる世界に造りたい願望という思考に変換しようとする。[6)]

また、賢治童話の中で宗教的情緒を持つ作品は、『十力の金剛石』[7)]、『雁の童子』[8)]、『インドラの網』[9)]な

---

5) 米地文夫、「「宮沢賢治銀河鉄道の夜の中の異質の挿入部分；ブリオシン海岸挿話」について」、岩手県立大学総合政策学会、Journal of policy studies 12(2)、2011-07、pp. 95~113.
6) 米地文夫、「「宮沢賢治銀河鉄道の夜の中の異質の挿入部分；ブリオシン海岸挿話」について」、岩手県立大学総合政策学会、Journal of policy studies 12(2)、2011-07、pp. 95~113.
7)『全集』第八巻、pp. 187~201.

ど少なくない。創作行動の基幹が宗教的信念からの一つの飛躍的念願であったにも拘わらず、宗教的臭味は微塵もないという草野心平10)のように、賢治童話は、重層的で普段使われる仏教用語が用いられながら、『四又の百合』は正編知の名前の登場から確かに仏教説話のように感じさせる。けれども、その中に経典の具体的な文章がなく、登場人物の動きと会話によってストーリーが進みながら展開していく。童話の内容は賢治独創的な流れとして展開していく。

『四又の百合』では無形世界の存在を想像させる表現があり、百合が意味する微妙な意味合い、林の中に現れる不思議な子供の登場、あの世の現象を感じられる意味深な部分がある。このように賢治童話は、日蓮宗の法華経に心酔していた賢治の信仰心と思考が節々に顕れており、擬声語や擬態語がオノマトペにより駆使されている特徴が見られ、それにより独特の文学的魅力を醸し出している。

Ⅲ。『四又の百合』の登場人物との関わり

『四又の百合』の登場人物は如来正偏知、王様、総理大臣、大蔵大臣、町の人々、子供である。『四又の百合』の時代背景は、王様、大臣、町の人々が登場する階級制度のある封建社会であり、如来正編知を受け入れている人間社会である。王様の命令で大臣達は如来正編知を迎える準備を始め、町の人々に指示して食事の準備、精舎の建築などに取り掛かる。林の中に登場する子供は異世界の存在のようであるが、相克し戦い合う存在ではなく、別の階層に入ると思われる。

王様、総理大臣、大蔵大臣は、世の中の権力者を象徴している。総理大臣、大蔵大臣は王様に従順な臣下として登場する。王様も大臣も世の中の権力者としての強圧的な傲慢さは見えず、『オツベルと象』11)の権力者の様子とは相違する。

「正偏知はあしたの朝の七時ごろヒ-ムキャの河をおわたりになってこの町に入らっしゃるさうだ。」
もちろんこの噂は早くも王宮に伝はりました。
「申し上げます。如来正偏知はあしたの朝の七時ごろヒ－ムキャの河をお渡りになってこちらへいらっしゃるさうでございます。」
「そうか、たしかにそうか。」王さまはわれを忘れて瑪瑙で飾られた王座を立たれました。
「たしかにさようと存ぜられます。今朝ヒ-ムキャの向ふ岸でご説法のをハムラの二人の商人が拝んで参ったと申します。」12)

8)『全集』第九巻、pp. 279~290.
9)『全集』第九巻、pp. 273~278.
10) 坂元兌子、「宮沢賢治研究」、『日本文学』(20)、1963.4、pp. 64~74.
11)『全集』第十三巻、pp. 161~169.
12)『全集』第十巻、pp. 98~99.

王様は熱心で篤実な信者である人物像として描かれてある。正編知を待ち望み、我を忘れるほど尊敬し、信奉している様子が現れている。正編知を受け入れている王様であるのでその国の人々も、人格的に大きく影響を受けていると思われる。国の皆が正編知を受け入れ、徳の高い信者も多く、人々の仲に不和が見られないほど、仏教国として定着しており、作品は終始、穏やかな雰囲気に包まれている。

この作品が書かれた大正時代は多様な思想が流入し、混乱した時代であった。当時の知識人であり博識であった賢治は、自分の作品の中で特別な意味を含まず人民という単語を使ったのではなく人は皆平等という概念で使ったと推測できる。平等の意味で敢えて使ったとすると、万人平等に暮したいユートピア思想があると考えられる。『四又の百合』も、最終的には仏を中心とする仏教国を願うユートピア思想が現れている。

黄英は、人民という言葉が国や社会などのニュアンスが含まれる言葉であるので作品に描かれた理想の世界は単なる人々の集まりではなく王権の統治下に置かれており、その王権は善の化身であり実際の政治とは遠くかけ離れていることは明白であると考えた。[13] 『四又の百合』の人民は、一般大衆を象徴する町の人々である。仏教を国教として受け入れた国に住んで、精舎を建て、喜んでいそいそ、わくわくしながら掃除を始める。“いそいそ”の表現から、心から喜んで働く、善良で勤勉なイメージである。噂を聞いて掃除を始め、大臣の指示で精舎を立て始める。賢治の童話の中にはユートピア志向があり、その中に“人民”という言葉が登場する。人民[14]とは、国や社会を構成している人として、平等な権利を持っている単語として使われている。作品の中で人民という単語は四カ所で登場する。『ペンネンネンネンネンロ・ネネムの伝記』[15]『三人兄弟の医者と北守将軍』[16]『学者アラムハラドの見た着物』[17]『四又の百合』である。

> “申し上げます。町はもうすっかり掃除ができています。人民どもはもう大悦びでお布令を待たずきれいに掃除をいたしました。”[18]

人民という単語は、国をイメージしている単語なので、作品のストーリーは違っても理想とする国を求める傾向が見られる。特に、『四又の百合』においても、強いユートピア思想が見られ、その形として現われる仏教国を望んでいる。最高権力者である王様が信心深い善人であるので勤勉で善良な民衆を保護し、争いのない国を作ることができる。賢治があえて使用した人民という単語は国に結び付き、賢治の童話の中ではユートピア思想が追求されている。

---

13) 黄英、「賢治文学におけるユートピア生成：『旅人のはなし』から、『双子の星』を中心に」、九州大学学術情報リポジトリ9、九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会、2005, pp. 15~22.
14) 人民：国家、社会を構成する人。特に、国家の支配者に対して被支配者を云う。官位を持たぬ人。平民。『広辞苑』新村出編、岩波書店、1986, p. 1258。人民(名) 社会を作っているひとびと。『三省堂国語辞典』三省堂、2005, p. 628.
15)『全集』第八巻、pp. 305~345.
16)『全集』第一二巻、pp. 183~198.
17)『全集』第九巻、pp. 330~337.
18)『全集』第十巻、p. 99.

登場人物の分裂闘争する部分はなく、全国民が喜んで大歓迎し、正偏知を一生懸命迎える準備をする。子供と大臣との駆引きの中に揉めごともなく、自分で判断し、譲り合う場面は何故だろうかと疑問を感じる部分である。

登場人物の中で子供はさりげなく登場して、子供の目には価値のあるものが見え、重要な役割をしている。子供と大臣の関わりを見ると、大臣は王様の命令を受け林に百合を探しに行くが、見つけることができなかった。迷いながら一人の子供に出会う。子供は大臣が探せなかった百合を持っていた。大臣は百合を買おうとし、交渉の末、子供は売ることにする。ところが子供はが急に自分が直接百合を捧げようと思いなおし、売らないことにしたのを、また心を変えて無償であげることにする。やはり、自分があげるよりも大臣があげる方が良いと判断した分別のある子供であると推測される。子供の言動には、階級的に自分より大臣の方が百合を捧げるに相応しいかどうかなどの迷いは見えず、自分が弱者、相手が強者のような卑屈さもない。大臣には見えない百合が見えた子供は、清い存在、悟った存在、宇宙と通じる存在としての登場していると考えられる。推測してみると、子供を通して百合を手に入れた大臣は、現世的な立場は高位でも、百合が見えた子供の方が仏の世界では位置が高い。仏教世界では人間社会の階級は関係なく、如何に解脱したのか、如何に清くなったのか、如何に徳を積んでいるのかによって位置が決まる。大臣がいる世俗世界と子供が住んでいるもう一つの異世界を設定しているようである。

賢治の他の童話の『雁の童子』は、人間が生きることは輪廻転生の一つで、自分の姿も輪廻転生の一部にすぎないという賢治の仏教思想が確かに示されていると思われる。この作品の中の童子は、『四又の百合』の子供とは多少異なる役割をしている。『四又の百合』の子供は不思議な役割をし、子供と百合の関係は、子供が清い存在で清い百合を持つことができた。百合は子供が住んでいる世界の付属物である。百合、子供、正偏知のラインができ三つの繋がりがある。

登場人物の区別	現実世界を中心にした順番	非現実世界を中心にした順番
如来	如来(世俗世界で信仰の対象)	如来
王様、大臣	王様、大臣(権力者)	子供(林の中で登場する)
子供	町の人々	町の人々(如来の来訪の知らせ)
町の人々	子供	王様、大臣

作品の中で仏を意味する正偏知は、実際現れていない清い存在として、世俗の世界とは違う人物として扱われている。王様と大臣達は、権力者であり世俗人のシンボル、この世の世俗の頂点に立っている者として、権力の象徴である。子供は、聖職者の役割であり、大臣は子供を通して仏に捧げる百合を探す役割をする。大臣は子供を媒介にして百合を手にいれる。聖職者のような役割を果している子供は、人間世界の中でも、清い存在として仏に近いと思われる。世俗世界では王様が頂点、世俗世界を基準にしない場

合、子供が世俗人より高い位置に立って、順番が変わる。

登場人物の中で如来は、噂を聞いた民衆達の想像の世界の中に登場している。赤銅の光は仏像のイメージに近くて、人間の様のようではない。紺色の蓮華も想像の世界であり現実ではない。世の中の権力者、支配階級である王様、大臣は、我を忘れているほど、完全に如来を受け入れている如来信者の立場である。非支配階級の一般民衆と子供も、同じ如来を信奉する立場である。子供は百合を探し出す役割を果していることから、作品の中の空間構造では特別のグループに属する。

非現実世界においては、現実世界とは違う価値観を持つ世界であるということを感じさせる。作品の最後の“二億年前のことである”という表現に、史実ではなく賢治の空想の世界が繰り広げられている。実在の人物であったかのような如来正偏知を国に迎える設定であり、上記の表のように、どちらの世界を中心にするかによって、人々の位置は変ってくる。昔から伝わってきた仏教説話を、賢治流にアレンジして新しく創った童話である。

Ⅳ。『四又の百合』の“百合”とは

『四又の百合』の中で百合の役割は何か、『ガドルフの百合』[19]の百合は、主人公が今まで気付かなかったことを悟るようにしてくれる存在である。この作品での百合の位置づけは、仏心、経典の説法、真心の対象の清いものとして考えられる。一斉に咲く百合が見えなかった世俗人である大臣に対して、子供は清い存在であるので最初に咲いた尊い百合を見つけることができたと解釈できる。

王様が百合を受け取って、“恭々しくいただきました[20]”という描写をするのは、百合に対してへりくだる謙譲の心を持っているからである。高い位置にいる王様でありながら尊いものとして百合を扱うことから、清廉で清い心の持ち主という印象である。具体的に千人の食事、千人の宿の表現から、王様の正偏知に対する深い信仰心が表われている。千という数字は物凄い数、数多い、限りないという意味を強調する。仏教説話が書かれている金剛経の中で集まった弟子達の人数を髣髴とさせる。

この作品では、『四又の百合』の四又の“四”が特別な意味合いを持っていると思われる。百合という花は花びらが四つの花は珍しい。希少な四枚の花びらを、あえて賢治が童話の題目にしたということに着眼し、研究しようとする。

百合の花びらは、大抵五つであるが、『四又の百合』の百合は四つである。特別に四つということに注目して考えて見る。一般的な目に見える百合は花びらが五つであるとすると、四つの花びらは普通とは違う珍しい存在、実際存在していない百合を意味すると思われる。自然界に見られる四数として春夏秋冬、東

19)『全集』第九巻、pp. 338~344.
20)『全集』第十巻、p. 102.

西南北など、また宗教においては仏教の卍字の模様、キリスト教の十字架のイメージ、作品の舞台の四つの設定等から、多様な解釈ができる。“四叉”という単語は題目だけにあり、本文では一切登場していない。四又という単語を題目につけた賢治の意図には、四叉が幸運の四つ葉のクローバーのように珍しく誰にでも見えるものではない貴重なものであり、隠された精神世界への誘導も含まれていると思われる。

> その家の前の栗の木の下に一人のはだしの子供がまっ白な貝細工のやうな百合の十の花のついた茎をもってこっちを見てゐました。[21)]

林の中の子供は、つぼみから咲いたばかりの一番良い百合を捧げようとする。“十の花のついた茎”という文節から、四又というイメージを想像させていると思われる。一本の茎に花が十個ついているのか、花びらが四つなので模様が“十”のように見えるのかなど複数の解釈ができる。解釈により、花が十個なのか、花びらが四つなのかが違ってくる。花が十個という解釈であれば、一本の茎に十の花が付いている百合を持っていることになり、花びらが四つという解釈であれば、一輪の百合を持っているのであると考えられる。

また、上記引用文の“はだしの子供”は、『ひかりの素足』[22)]の素足の概念と同一線上にあり、“貝細工のやうな百合”は、『ガドルフの百合』と通じる。賢治の童話の中で、イメージ化していると思われる。百合は珍しく尊いものという意味を持ち、あえて四つの花びらから連想される特別なイメージを呼び起こす花として描かれている。

賢治の童話、詩の中にも百合が所々で登場している。先行研究によると百合は初恋の相手の象徴のように解釈[23)]されているが、本研究では、百合の中でも“四叉の百合”に注目をおいて追求しようとする。

> 怒り立つ　四叉の百合と　麻むらの　さびしくこむる青阿片光
> 青ひかり そ々ぎながらも　雨はふりて　一列白き百合はぬれた[24)]

怒り立っている百合が普通には見られない“四叉の百合”である。普通に想像できる百合ではなく、険しい表情を持つ異形の百合である。詩の中の百合は、春らしく穏やかな百合ではない。青光りの雷が怒っているような百合は、暗くて危険な雰囲気を放ち、自分自身の中の怒りを表わしているようである。賢治の童話や詩は、常に自然描写を通して、心理表現がなされる。作者の心の葛藤、混乱している心境を百合が怒っているという表現で表わしたとも思われる。

賢治は、何故“四叉の百合”という表現をしたのか。百合の中でも“四叉の百合”は、上記のように仏教の

---

21)『全集』第十巻、p. 101.
22) 朴京娗、「宮沢賢治『ひかりの素足』の二つの世界－足と裸足と素足、光の素足を中心に－」、『日本言語文化』第45輯　韓国日本言語文化學会、2018.12、pp. 197~216.
23) 境忠一、『宮沢賢治の愛』、大日本印刷株式会社、1978、pp. 40~44.
24)『全集』第八巻、p. 41.

卍字の模様、キリスト教の十字架のイメージ等と関連づけると真実、精誠、愛情、清廉潔白等の特別な意味を持つ花になる。詩の中での“四又の百合”は怒っている。どうして怒っているのかを考えてみると、正しい心でありたい作者が正しくない状態である自分自身を責めているようである。自分の心が正しくないので百合から叱責を受けるように感じる作者の感性を窺わせる。煩悩に苦しむ受戒の心境の表われである。

自然の描写を通して自分の心理を表している『がドルフの百合』での百合は、穏やかではない特別な環境の百合である。本研究者の拙稿で『ガドルフの百合』の百合は、上の詩の中の“四又の百合”の百合とは感じられる意味合いが随分違う。『ガドルフの百合』の百合は、三つの段階に分けて解釈した。[25] それとは違い『四又の百合』の百合は、純粋な子供の目に見える珍しい百合であり、如来正偏知に捧げる百合である。百合のイメージを真実、清純、仏法、汚れがないものとして考えると、『四又の百合』での百合と通じ、詩に見られる不穏な要素は探すことができない。

この作品の中の百合は、心の純白、如来正編知に対する姿勢として心を捧げ、綺麗な心で迎えるシンボルである。綺麗な心でなければ迎えられないので、掃除もし、精舎も立てられ、花も準備し、最上の心で迎える。この作品の中の百合の役割は、花のつぼみに生けるように作品の中でも百合が生けられている。特別な存在である。百合そのものが持つイメージは、花言葉が純粋、純白、潔白、真実、誠実である。『ガドルフの百合』の中の百合は、咲いている百合を見ながら悟る役割であれば、この作品の百合のイメージとの差が感じられる。心を形にしたものとして百合をシンボルにして捧げている。

また、『十力の金剛石』の金剛石の力と『四又の百合』の百合の力は共通点がある。金剛石と百合は、精神的なパワーがあり、そのパワーの発生は汚れてなく、くすんでなく完全に透明で清いので価値がある。仏教の説話の中では蓮がたびたび登場する。賢治童話では蓮ではなく百合の登場は、わざと仏教色を消そうとして書いたかもしれない。精神的な霊力のシンボルとして金剛石、貝細工のような百合に例え、関連づけて云える。

『四又の百合』の百合は、誰でも持っている宗教心、人々の真心の象徴として心を捧げることを表わす。子供が発見した百合の意味は、綺麗な心で大事なものの象徴として特別な百合である。作品の中で百合の流れを追求して見ると、最初の題目の四又の百合、王様が正遍知に捧げようとする一本の百合、大臣の目には見えない百合、子供が持っている百合、貝細工のような百合である。つぼみができてから、もっとも貴重なさきかけの百合を捧げようとする。始めて咲いたばかりの百合を捧げるのは宗教的な清い心を象徴している。

---

25)『ガドルフの百合』の中での百合は変化する。初めに登場する百合は恋する百合であり、恋する百合に砕けないことを願いながら、勝った姿に変わったのが最後の百合である。(中略) 二段階は、百合は折れて、砕けた状態に変化した段階である。それは、本来の姿を守れずに失って、百合に現わされる誇り、ガドルフの理想の姿が壊れたことを意味する。最後の三段階は、百合は勝った状態の段階である。その意味合いは、砕けた百合が勝つようになったことは、発見、苦難、葛藤と怒り、屈服、断念、葛藤後の勝利、永遠の勝利の結果である。その段階を経て作品の中の百合の位置づけは、賢治のありたい姿が成長していく過程として解釈した。宮沢賢治の『がドルフの百合』の心象スケッチー物理的な空間と精神的な空間ー、日本学　第52輯、2020．12、東国大学校　文化学術院　日本学研究所、pp．165~188.

Ⅴ。『四又の百合』の空間構造からの“四”

この童話の表面的な空間構造は、王様がいる陸地、川という境界、如来正編知のいる陸地、林の子供の空間に区切られる。空間構造の区切りを仏教的な概念から捉え解釈しようとする。空間構造を見ると『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』ではばけもの世界と人間世界、『やまなし』[26]では蟹とかわせみの関係が共通する内容である。『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』はばけもの登場、『やまなし』では蟹が人間の立場に例えられ、かわせみがばけものに例えられる異なる空間の話は対照的な部分である。人間とばけもの、蟹とかわせみ、異なる空間からとどけられる感情は、蟹にとってかわせみに対しての恐れと同時に尊敬と喜びの心理状態であると解釈できる。

『四又の百合』においても異なる空間で、人間と如来、大臣と林の子供が遭遇している。子供は本当の人間の子供なのか、無形の異空間の存在なのかは確実ではないが、不思議な存在である如来は人間としては登場していない。如来に対する尊敬と喜び、不可解である故の恐れが感じられる。

賢治の多くの童話において空間構造とは、鬼神が住む空間と鬼神がいない空間、それは現実と非現実の二構造で分けられる。『四又の百合』の物理的な空間は、お城、川などの空間であるとすると、仏教的な存在である如来の空間は、多次元的な空間である。

賢治童話で神道と仏教の共存は、多くの個所で見ることができる。また、賢治童話では多くの動物達が登場する。動物は擬人化して登場するので賢治は菜食主義になって生きているものを食べることに罪意識を持っており、それが童話の中に現れている。その罪意識は、賢治の霊的な体験との関連を持ち、作品の中で鬼神や動物達がよく登場し、そこから目に見えない空間構造が創られている。賢治が書いた目に見えない世界の空間構造は、鬼神と一緒に住む空間であり、『やまなし』の中に現れている蟹とかわせみがかかわり合う空間でも見られる。『四又の百合』は如来信仰の話であるが、凡教、シャーマニズムから一脈通じる部分があると云える。根拠のないファンタジーの世界ではなく、宗教とシャーマニズムを土台として、如来が登場するので、読む者にとって確実性が高まる。背景の基本に宗教が横たわっている。

2次元と3次元の世界は、フィクションとノンフィクションの世界である。2次元の世界はファンタジーの仮想世界で、鬼神が住む世界、空想の世界である。3次元の世界は、人間が生の営みをする現実の世界である。賢治の童話の『風の又三朗』[27]の世界は、2、3次元を往来し、鬼神が住む世界、鬼神がいない空間への変移が書かれている。作品を読む視点は、鬼神の視点、人間の視点から話が展開する部分、視点の変換が空間構造の中で交差している。4次元の世界は生きた人が他界した世界で、霊界と呼ばれる無形世界である。2次元と3次元の世界、『四又の百合』の作品の中の仏教概念を基にした4次元の世界を複合した空間構造は、王様と町の人々がいる陸地、川という境界線、如来正編知のいる陸地にと区切られる。そこに

26)『全集』第十巻、pp. 5~9.
27)『全集』第十一巻、pp. 172~211.

子供が存在する異空間が加わり四つとなる。

1．王様と町の人々ががいる陸地

王様がいる陸地は、王様の城付近と町の人々の生活空間を云う。この作品の王様のいる国という舞台設定は、争いのない理想的な仏教国を背景としている。賢治は仏の教えを中心とした国を理想として考え、封建的な権力者と民衆の組織としてだけの国ではなく、思想と信仰が土台に敷かれている。仏教を国教として受け入れた国を望んだ王様も仏を待ち望み、国全体が仏を待っている舞台設定であると云える。

> 「正偏知はあしたの朝の七時ごろヒ-ムキャの河をおわたりになってこの町に入らっしゃるさうだ。」
> 斯う云ふ語がすきとほった風といっしょにハ-ムキャの城の家々しみわたりました。
> みんなはまるで子供のやうにいそいそしてしまひました。なぜなら町の人たちは永い間どんなに正偏知のその町に来るのを望んでゐたか知れないのです。それにまた町から沢山の人たちが正偏知のとこへ行ってお弟子になってゐたのです。[28)]

物語りの始まりの舞台設定である。作品の前半で“正偏知はあしたの朝の七時ごろヒ-ムキャの河をおわたりになってこの町に入らっしゃるさうだ”という文章は3回も繰り返して登場する。それは王様がいる陸地は仏教国であることを、深く感じさせられ強調するためである。町から正偏知のところに行って弟子になっている設定も王様がいる陸地である町と正偏知の場所との関連性があると見られる。王様がいる陸地の3次元世界と、正偏知のいる陸地の仏教概念を持つ4次元世界はヒ-ムキャの河を間に行渡れる空間である。

王様は正偏知を心から受け入れ、尊敬している様子が見られる作品である。作品全般に王様の性格、人柄をうかがわせる文章が多くあるが、そこから導かれる王様の人物像は、如来を完全に憧憬している王様は篤実な信仰者である。“我を忘れて玉座をたった”との様子からも王であるのに純粋で正直であり、事前に細やかな準備をすることから勤勉な人物であることが分かる。百合がまだつぼみなので翌朝咲いたばかりの百合を捧げようと王様は大臣に頼む。町の人々には精舎のチェックをし、町の掃除、千人の食事の支度の指示を出すことから、細かく準備性がある誠実な王様のイメージであり、正偏知を向かえるのに積極的な人物である。それは王様は篤実な信者であるので、如来を向かえるにおいて人任せにせず、自ら対処する姿を見せている。

世俗的な人物である大蔵大臣が子供が持っている百合を値切る部分から、物質に執着している様子が見られる。世俗的で物質にこだわりがあり、三回も値切るほど、金銭にこだわる現実主義であり、子供を相手にしている大臣の個性がうかがわれる。

---

28)『全集』第十巻、p. 98.

「その百合をおれに売れ。」
「うん、売るよ。」子供は唇を円くして答へました。
「いくらだ。」大臣が笑ひながらたづねました。
「十銭。」子供が大きな声で勢よく云ひました。
「十銭は高いな。」大臣はほんたうに高いと思ひながら云ひました。
「五銭。」子供がまた勢よく答へました。
「五銭は高いな。」大臣はまだほんたうに高いと思ひながら笑って云ひました。
「一銭。」子供が顔をまっ赤にして叫びました。
「そうか。一銭。それではこれでいいだらうな。」大臣は紅宝玉の首かざりをはづしました。
「いいよ。」子供は赤い石を見てよろこんで叫びました。大臣は首かざりを渡して百合を手にとりました。
「何にするんだい。その花を。」子供がふと思ひ付いたやうに云ひました。
「正徧知にあげるんだよ。」
「あっ、そんならやらないよ」子供は首かざりを投げ出しました。
「どうして」
「僕がやらうと思ったんだい。」
「さうか。ぢゃ返さう。」
「やるよ。」
「さうか。」大臣は又花を手にとりました。[29)]

大臣は十銭から一銭まで値切ってから、最後に首飾りを渡す。それは最初から子供との会話をおもしろがって楽しんでいたかも知れない。大臣のキャラクターは、子供と首飾りを値切る場面の解釈によって、解釈が違ってくる。十銭から一銭まで値切って、最後に金銭ではなく首飾りと交換する。首飾りの値段が豪華なものなのか、その価値は分からない状況である。首飾りの価値が一銭であれば、そのとおりの会話になる。そうではなく元々価値があるものであればが、大臣がしまりやでけちな人物となる解釈の可能性がある。高い価値のある首飾りであれば、百合の価値が高いということを最初から認めたとの結果になる。大臣は最初から百合が尊いもので価値のある花であることを分かって、値切るものではないということを、最初から分かっていたことになる。お金で値切って、お金の代わりに代金を首飾りとする。一銭の代わりに首飾りをもらう子供の立場としては便宜的に困る。大臣は、お金を持ってなかったので首飾りを渡したのか、或は子供が要求するのとは違い、自分の価値観を押し付けたのか、いい解釈をするなら、値切った後にもっと価値のあるものをあげたのか、多様な解釈ができる。

それに対して子供の反応は、一応喜ぶが、花を使う用途に付いて質問する。如来にあげるのを知ってから首飾りを投げ、直接あげたくて、商売そのものをやめようとする。如来を尊敬し、無償でさしあげる喜び

29)『全集』第十巻、pp. 101~102.

を知る子供であることから、如来は人々に尊敬され、慕われている存在であることが分かる。大臣に百合を渡して大臣が百合をあげるのではなく、直接あげたいと思う。それを聞いた大臣は百合を返そうとしたが、子供の心はまた変わる。如来にあげる百合であるならと金銭を断る。やはり名もない自分より偉い人である大臣から百合をあげた方がいいと、現実的な判断ができる子供は、内面的な感性が高い性格が現れ、商売ができるぐらいの生活力があり、社会性があり、金銭の感覚も持っている。

王様がいる陸地という空間は大臣と子供の駆け引きから考えられるように人間模様の世界が描かれている舞台設定となっている。

2. 川、ヒ-ムキャーの河、修弥山

川を境にして、王様がいる所と、如来正編知がいる川の向こうは、三途の川の向うの涅槃世界とも考えられる。城を中心に一般の人々が住む住居地の場所、川の向うは、如来と修行する人々がいるところで、千人以上の人が来るのは、仏とその弟子達が来る設定である。川の役割は、世俗人と宗教者の世界の境目であると思われる。実在の人物がいる場所なのか、無形世界なのかは、確実ではない。

川の向うには如来正編知がいるという設定である。川の向うの舞台設定は、場所の区切りをすることによって、あの世の三途の川をも思い浮かばせる。川を渡ってそこにいる如来正編知の姿は、川の向うでぼうっと虹のようであるとのように神秘的な世界を想像させる。如来正編知は、人間のように実物で現れるのではなく、あの世の見えない霊的な存在として現れ、あの世の世界を認めた上での話としてとらえられる。

川の向ふの青い林のこっちにかすかな黄金いろがぼっと虹のやうにのぼるのが見えました。[30)]

皆が川の向うを向いて膝をひざまずいて待っているので、如来正編知が実体を持って現れているのか、結末は書かれていない作品である。実際目に見えない世界の存在なので川の向うで、実は実体のない実物の存在ではないかもしれないというように、思わせる部分で終わる。作品の続きがないことから、目に見えない存在が目に見えない心に訪れるようにする意図が見られる。

賢治童話は、比喩表現や二重構造が多く、研究の題材としては多様な角度から多様な解釈をすることが出来る。『四又の百合』の物語りが展開するヒ-ムキャー河は、古代チベット地方の川であると考えられる。川を境に対照とされる二つの世界があり、その中に重なっている部分は多元的な二重構造の子供の世界である。『インドラの網』には、ツェラ高原が舞台になる。チベットにある地名で、ツェラ高原から『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』も発生し、チベットの山で異なる世界を繋ぐ媒介とされている。人の世界と天の空間は、『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』の中では、化け物世界と人間の世界がとちらも

30)『全集』第十巻、p. 102.

高原を舞台に同時に存在し繋がっている。[31)]

この作品では王様のいる陸地と川の向うが、人の世界と天の世界ではないかと思われる。本当に現実の人間の人の世界なのか、実は天の世界が一時的に現れているのか、現れ方に共通点がある。『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』の中でもこのような二つの世界がある。人の世界に戻ったり、空想世界に入ったりするそこがチベットである。チベットは、仏教の基盤があるところであり、シャ-マニズ-ムがベースにある。仏の世界の修弥山は仏の世界に存在し、架空の世界である。川は、想像上の二つの世界の接する場所である。賢治がチベット高原を人の世界と天の世界が重なる地、融合圏と空想しても不思議ではない。

仏の世界の修弥山が融合圏のように、チベット高原が現実に存在する地域で、そこに架空の存在が修弥山という話の展開である。現実と空想が重なっているところである。融合けんは、もう一つの世界、人と天の世界が重なっている世界、異世界である。チベットは仏の世界を近く感じることができる歴史性のある地である。賢治は、自分が耕している岩手の農地に理想を具現化しようとした。その農地の現実が天となる、人と仏の世界が融合して重なって一つになる。仏教思想では、人と仏が別々ではない。理想的で宗教的な側面に重点を置いている。

酒井は、ぶつかりあう二つの世界の二元性に注目した。音声と無声がぶつかり合う中間点、それを境界断面と呼び、そこが秘密の世界であり、賢治が云わんとする倫理の調整点がある世界である。聞こえる声が重要か、聞こえない声が重要かではなく、その接点に賢治の白熱する世界があり、エネルギーを投入して云おうとする世界を表わした言葉が賢治が云おうとする部分である[32)]と云っている。音声と無声がぶつかり合う中間点、それが境界断面で、このような言葉が賢治が云おうとする世界である。ぶつかる所が賢治が云わんとする世界で、そこに倫理の調整点がある。聞こえる声が重要か、聞こえない声が重要かではなくて、その接点が賢治の白熱すべき世界がある。エネルギーを投入して云おうとする世界、云いたい世界があるのではないかと思われる。無言の問題提起をされた読者に文学的余韻を残す作用をする。酒井の考察の中で、吉本は、噂話などの紙面に書かれていない陰の言葉は、幼児性と大人の心が葛藤しており、現実と非現実であり、現実と異空間と区別できると解釈し、天沢は、二つの場の存在と位相の違う二つの場の存在を指摘した。[33)] 二つがぶつかり合ってそこから出てくる秘密が境界になる断面を倫理の調整点であると見た。二つの場の存在とは、音声を持つ言葉としてはっきり書かれている表の言葉と、書かれていないけれども多くの人々に噂で伝わる陰の言葉である。作品の中で書かれている言葉以外の言葉は陰の言葉と云える。

『四又の百合』の中で、“正偏知はあしたの朝七時ごろヒームキャの河をおわたりになってこの町へ入らっしゃるそうだ”という噂の声を陰の言葉として3回も表現している。童話の中の人間達は、二元性によるイ

31）吉村悠介、「「羅須」からめぐるふたつの須弥山：宮澤賢治「羅須地人協会」命名考」、Annual bulletin of the new humanities (5)、北海学園大学文学研究科、2008.12、pp. 260~305.

32）酒井明子、「二つの世界とイノセンスの所在及びその意義ーエンデと賢治を巡ってー」、『横浜商科大学紀要』(7)、横浜商科大学、1991-10、p. 301.

33）前掲書、p. 302.

ノセンスを感じさせる。[34)]

本研究では、『四又の百合』の上の内容のように表わされている言葉と行間に読み取れる言葉により、賢治童話の美しい内容を読むことによって読者は影響を受け、浄化などの変化がもたらされイノセンスを保障される。作品の中で川の空間設定は、3次元の世界と4次元の世界を交差する役割を果している。川の手前は現実世界であり、川の向うは人間の姿で訪ねてくるのか確かではない正偏知がいる世界である。故に川は現実世界の3次元世界と一般にあの世といわれる4次元世界が重なっている空間と云える。

3. 如来正編知のいる陸地(島)

『四又の百合』は、釈迦が生きていた時期の旅行中の話なのか、釈迦の死後、実体がない時期に釈迦が来るという話を書いたのかは不明である。釈迦が生きていた時期は、まだ布教が進んでなく国の単位で釈迦を受け入れる段階ではなかった。作品の時代背景がはっきりしていないため、実際に正編知が生きていたのか確実ではない。釈迦の死後から仏教を国教とする国が生まれ、実体を持つ釈迦は亡くなったが、如来と云われるような徳の高い人、高僧の存在が現世に望まれていたと思われる。童話の想像の世界を広げるために、作品の最後に2億年前のことだと書いてあるのは、この説話のような話しが実話ではなく幻想の世界であるとわざとぼかしているように推測できる。

この作品の中では、ある一つの国の権力者の全てが如来正編知につかえている。この世の権力者より如来正編知が重要であるということが、大前提にして書いてある。

> みんなは思ひました、正編知はどんなお顔いろでそのお眼はどんなだらう、噂の通り紺いろの蓮華のはなびらのやうな瞳をしてゐなさるだらうか、お指の爪やほんたうに赤銅いろに光るだらうか、また町から行った人たちが正編知とどんなことを云ひどんななりをしてゐるだらう、[35)]

正編知のイメージは仏像を連想させる。“紺いろの蓮華のはなびらのやうな瞳”からは、実際の蓮華の花びらの色とは程遠い。“爪やほんたうに赤銅いろに光る”部分からも銅像のイメージで人間の姿のようではない。これから来る正編知を待っているのであるが、向うの世界を現実世界ではなく非現実世界であるとの解釈もできる。正編知の教えや経典の内容を伝えるために、実際来るのは正編知本人ではなく弟子であるとも考えられる。

『四又の百合』に見られる人間社会の組織の中の階級は、王様を中心に大臣達などの臣下が仕え、町の人々を含む国民を統治している封建社会である。しかし人々は皆、霊性において最高位にある如来正編知につかえている。仏教思想の中で他力的な思想の他力本願は、自分の力で恵みを受けるのではなくて他か

34) 前掲書、p. 302.
35)『全集』第十巻、p. 98.

らの力によって変化がもたらされることを願い、恩恵を望む。如来正編知に百合を捧げようとする王様や大臣達は、正編知を待ちながら誠心誠意の準備をする。町の人々は綺麗に掃除して、精舎を作って待っているのは、恩恵を受けるための準備である。その恩恵を受ける為の努力は、自力本願の要素である。仏教思想の下、自他力双方の修行のような生活をしている人々の様子が見える。

国民全体の霊的成長において、如来正編知、宇宙からの霊的パワーを受けることは必須である。見えない世界の仏教的な宇宙観を持ち、見えない存在からの恩恵を受けようとする要素が王様から庶民に至るまで見られ、眼に見える物質的な国の発展ではなく、眼に見えない精神的な部分において成長するために如来正編知が必要である。

菅原浩は、霊的成長において宇宙からのサポートを受けるという要素は、伝統的霊性においては欠くことのできない要素であり、[36] 百合の価値は高いという証明である。国の発展のために如来正編知の存在は必要不可欠で、百合は物質の意味だけではなく、精神を象徴し、非常に価値のあるものである。

普遍神学は、神学を探している段階の学問である。究極的なもの、宇宙の根元を探ろうとする神学の全体を云い、キリスト教、仏教の神学も入り、太極、陰陽の中心、全てを含めて云う。多元的階層論は、宇宙という存在がただ一元的なものではなく、天上界の存在、中間界の存在、地上界の存在、色んな存在が多元的に存在するのが宇宙であるという理論である。

仏を意味する如来正遍知と王様の境界線は、この世ではない世界とこの世の中の権力者の世界である。大臣は仏に捧げるために百合を探しにでる。大臣には目に見えなかった百合が子供には発見でき、手に持って立っている。子供は、値切って駆け引きしながら大臣に百合を売ることにする。しかし、百合を如来正遍知に捧げることが分かってからは、何ももらわずに自分から百合を捧げようとする。大臣は子供から百合を貰い林を回って川の岸へ行く。その百合を王様が受け取って、金色の虹が昇るような岸で如来正遍知を待つ場面で終わる。王様、大臣など世の中の権力者が全て仏につかえ、仏こそがもっとも尊い存在であることが強調されている。

賢治は夢で体験したことを基にして幾つかの幻想的な童話を書いた。『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』のばけものの存在は法華経をベースにした説話風の如来の物語りとは矛盾する。目に見えない世界が存在することを賢治は実感して、確かではない空想の世界を童話を通して話している。賢治は夢体験、実体験を童話の創作要素としている。見えない世界には完全な認識を持てないため仮想の世界と云える。賢治のある種の作品は現実の人物が夢の中に登場する夢体験が基礎になっていると思われる。

『ガドルフの百合』での空間構造は精神的な空間と物理的な空間に区別される。『四又の百合』では、2次元の仮想世界と3次元の現実世界として次元的な観点で区別し、物理的な空間は川を境にまた区切られる。林の中では、異次元の世界が存在する。林の中の子供と大臣のように、同じ状況でも百合が見える人がいれば、見えない人がおり、そこは精神的な空間として区別できる。川の向うの如来がいる世界は4次元

36) 菅原　浩、「霊性哲学の表現としての普遍神学の構想」、『人体科学』17-(1)、Society for Mind-Body Science、2008、pp. 9~21.

とし、王様と町の人々がいる世界は3次元の世界、その境目の川は3次元と４次元を往来できる世界であり、林は3次元の世界の中でも異次元の世界に区別する。

4. 百合がある林

『四又の百合』の子供は、百合がある林に登場する。大臣を前にして恐れて小さくなることもなく、しっかりした態度を見せている。 百合を売る駆け引きをしながらも純粋で 率直な気質である。大人には見えなかった百合が子供には見えたのは何故かと考える時、綺麗な心を持っていたためだと思われる。清い心を象徴する百合を探し出し、後に如来正徧知に会えるようになる。子供が小さい菩薩のように清い存在と仮定すると作品全体の流れに通じ合流する。大臣が百合を探している行動が、人が悟りを求める過程と見ることができ、百合を探した『四又の百合』の子供は、解脱した者の象徴である。

『烏の北斗七星』[37]の最初の子供の登場は、子供の目に烏がうつってから、そこから物語りが始まる。大人ではなく、子供なので、子供の目は、大人の目には見えないものが見える存在である。『なめとこ山の熊』[38]も、子供の登場から異世界が始まる。作品の中でファンタジーの世界に連れていく役割をしている。仏教での解脱した小さい菩薩のような存在の役割を果していると云える。『四又の百合』の子供は、そのような特徴を強く表わしている。子供は、王様のお城がある町の一人であり、林の中で大臣の目には見えない百合を見つけている人物である。

> その家の前の栗の木の下に<u>一人のはだしの子供</u>がまっ白な貝細工のやうな百合の十の花のついた茎をもってこっちを見てゐました。[39]

『四又の百合』の子供は、はだしの状態で登場する。“一人のはだしの子供”は、清く飾りのない真心のそのままの存在を強調のため使っている。『ひかりの素足』にも裸足の子供が登場する。飾っていないありのままの子供である。以前の原稿の拙稿『ひかりの素足』[40]では、素足と裸足の区別の中、素足は内面的な清廉など宗教的に意味を持つものであり、不思議な世界に存在する。裸足は、物理的に何も履いていない状態を意味し、極楽世界に今から行こうとする状況の中、極楽世界に到着する前後が対照的に描かれている。『四又の百合』では、そのような比較の対照がない。

子供のはだしは、境界線の存在、あの世の存在であることを想像させる。はだしの子供は、急に現れた空間に立っている姿から、この世の存在なのか、或はあの世の存在なのか、この世とあの世に重なっている

37)『全集』第十二巻、pp. 38~45.
38)『全集』第十巻、pp. 264~272.
39)『全集』第十巻、p. 100.
40) 朴京娗、「宮沢賢治『ひかりの素足』の二つの世界－足と裸足と素足、光の素足を中心に－」、『日本言語文化』第45輯 韓国日本言語文化學会、2018.12、pp. 197~216.

存在なのか、又は境にいるのかを連想させるはだしである。拙稿『ひかりの素足』のはだしの子供は、裸足で人生を終了した罪のある存在、穢れている存在とも言える[41]と解釈した。この解釈と『四又の百合』のはだしの意味があの世の設定という繋がりがあると思われる。はだしの子供は、まだ極楽世界に行っていないが、偽りのない、これから百合を捧げる行為等により徳積みをしていると云える。

今井は、禅のように、小我が大我に溶融する世界。あるいは、『インドラの網』のように照らしあい、すべてが繋がりあっている世界[42]、それを異形の子供が象徴し、小さい菩薩のような役割をしている。元々の仏教のインドラの網のような華厳経の悟りの影響を受けた異形の子供は、自分の中に我がない存在、解脱した無念無想の存在、仏教的宇宙観の中で宇宙と通じている存在である。また、異形の子供の存在を仏教的に云えば、清く、世の中の罪悪、しがらみ、我から抜け出した執着のない存在であり、個人と全体、全てが連結している本然の世界と通じている。異形の子供に遭遇することが、悟りに至ることを意味するとすると、大臣が子供に遭遇することも同一線上にあると解釈できる。『四又の百合』でも林の中で子供に遭遇する。

不思議な世界の接点を象徴する子供がいる空間で、はだしは罪悪世界から抜け出した清さを意味し、手に持つ百合は純白なイメージを醸し出している。王様は一輪の百合を捧げようと熱心に探し、王様が膝まずいて待っていたが探せなかった。世の中の位置関係においては、百合が見える子供がいなければ探すことができなかった。この世では王様が一番上であるが、宇宙の全体で見ればそうではないことになる。子供がいなかったら百合は探せなかったことになる。

目立たない静かな所でひっそり住んでいる名もない子供であっても、如来を敬愛している信心が現れている。機会があれば何か如来にしてあげたい心を持っている。法華経に帰依している賢治は、如来に捧げたい自分の姿を子供を投影しているようである。

百合のある林は、はだしの子供がいる空間として解釈しようとする。『ひかりの素足』の素足とはだしの二つの意味についての対照とは違い、二つの世界が重なっている二次元的な空間として捉える。子供が登場するその空間が二次元的なものを思わせる。それは肉眼では見えないあの世を思わせるような空間である。根拠となるものとして、賢治の作品の中では、この世のしがらみや罪悪を脱ぎ捨ててあの世に行くときの状態として“はだし”という単語がよく使われている。子供がいる林は、あの世と重なっているその境界線を思わせる空間である。家の前に子供が立っている幻想的な場面がある。非常に矛盾している。

> 大臣は林をまはりました。林の蔭に一軒の大きなうちがありました。日がまっ白に照って家は半分あかるく夢のやうに見えました。[43]

41）前掲書、pp. 197~216.
42）今井重孝、「生きる「拠り所」としての教育思想の可能性」、『近代教育フォーラム』 第6号、History of Educational Thought Society、広島大学、1997、pp. 73~80.
43）『全集』第十巻、p. 101.

林の中は蔭なので薄ぼんやりして位置的には暗い所である。暗い所で日が真っ白という表現は矛盾しているが、それによりファンタジックな世界を創っている。林の蔭は日光が直接当たらない所である。あの世から、仏の国から急に現れたような幻想的な場面である。賢治のこのような証明できない部分に神秘性があり、上記の“風がサラサラ吹く”との表現も賢治の無知からではなく、想像させる効果を与える部分として解釈できる。

林は異なる空間で、眼に見える空間と眼に見えない空間が二重に存在している。それは百合が見えるか見えないかによって区別できる。宗教用語で云うところの精進による霊性の水準と関わりがあると思われる。垢がついていない子供は、現実世界の中で異なる世界を持つ。

『やまなし』の空間構造は、重層的な空間構造である。かわせみが住む空と蟹が住む川底、二層になっている。『四又の百合』の如来の世界と王様の世界に比較できる。理想の構造を見るとき水面の接点は、『四又の百合』の川の役割と共通点があると思われる。この川は、賢治において、確実な思考の流れの中にあるものであり、川を境にして区別される世界が言わんとする主題を追求する役割を持っている。

この作品で何故“如来がいらっしゃる”という設定をしたのかについては、『ガドルフの百合』の最後の場面で主人公の新しい出発と関連性がある。そこに如来がいらっしゃることと、これからの主人公の出発は、未来に対する期待であると共に願望である。

舞台背景の設定の区切り	立体的な空間構造
如来と弟子達の住む世界	無形世界、有形世界(解釈による)
世俗人(王様と町の人々)が住む世界	有形世界
如来の世界と世俗界の境目の川	無形と有形世界が重なっている世界
子供の住む林	有形世界の中に重なっている異空間

物語にはこの世の組織と仏の世界の組織とは違うという概念が根底にある。この作品において現実世界は、有形と無形世界で、眼に見える体と眼に見えない心の世界、肉体と精神の世界である。非現実世界は、空想の世界で如来の住む世界である。現実世界は王様と町の人々が住む世界、子供が住む林、境目の川の三つのグループであり、非現実世界である如来の世界を含め四つのグループに構成される。現実世界は、如来の世界以外である。それは川を境にして対照的に分けられる。有形世界の中で異なる世界と重なっている部分は子供の異空間の世界である。川の向うは宗教者の世界と云える。物語は、実在の人物と実在の町の話なのか確かではなく、仏教説話風であるが史実と関係があるのかも断定できない。それがまた賢治童話の想像豊かな魅力の要素である。

Ⅵ。終わりに

賢治童話の『インドラの網』、『雁の童子』、『四又の百合』などに見られるように仏教説話風の作品は多数である。当時の知識人であった賢治は、この作品に理想的な仏教国を創りたい願いを込めて執筆したと思われる。仏教を国教とする極楽世界があの世にあるのではなく、この世で極楽を創ろうとするユートピア思想の現れである。当時日本は軍国主義一直線であり不安定で暗鬱な世相の中、現実世界における争いのない平和な国づくりの実現への念願を書いた作品である。

作品の中では王様から一般庶民まで全ての人が仏の来訪を待ち望み、穏やかで平和な国を創りたい願いと仏の教えを具現化する国への願望が現れている。作品の最後に“二億年ばかり前のことであった”と仏教説話風且つ遠いおとぎ話のように書き、余韻を残している部分も賢治童話の特徴と云える。

賢治の童話は、比喩表現や二重構造のストーリー構成が多い為、研究角度によって多様な解釈ができ、推測をすることができる。この作品はストーリーがシンプルであるが、当時の社会の中に公に表わすことが出来なかった賢治の平和への願いと理想世界への構想が隠されている。賢治童話の特徴と宗教との関連性、賢治の思想と『四又の百合』の仏教意識、仏教説話に表われる百合、何故四又なのかを追求した。また、百合に焦点を置いて子供の異空間、王様と町の人々の空間、境目の川、如来の世界の空間構造、作品の舞台の設定から見られる四つについて考察した。

賢治の童話は科学的に理性的かつ合理的に証明できないが、作品全体を通して賢治特有の心象世界を表わしている。『四又の百合』では、無形世界の存在である仏に捧げる百合を人間の信仰、真実な心に例えている。幻想的に子供が現れている賢治の作品には、見えないものが実在することを信じている賢治独特の思想が現れる。それが幻想の世界、夢の世界、理想の世界、死後の世界として登場している。賢治が幅広い世代に人気がある秘訣は童話の部門であっても作品が純粋で鋭い感性により独創的に書かれており、子供に偏らず各世代に抵抗なく受け入れられることであると云える。『四又の百合』も童話でありながら全年齢層の読者に本質的な疑問を投げ掛け、問題提起している作品として題目から切り込み研究した。

〈参考文獻〉

『広辞苑』新村出編、岩波書店、1986.
『三省堂国語辞典』三省堂、2005.
『校本宮沢賢治全集』第十巻、筑摩書房、1995.
『宮沢賢治Ⅱ』日本文学研究資料叢書、有精堂、1989.
境忠一、『宮沢賢治の愛』、大日本印刷株式会社、1978.

菅原　浩、「霊性哲学の表現としての普遍神学の構想」、『人体科学』 17(1)、Society for Mind-Body Science, 2008.
朴京娗、「宮沢賢治『ひかりの素足』の二つの世界－足と裸足と素足、光の素足を中心に－」、『日本言語文化』 第45輯　韓国日本言語文化學会、2018.
朴京娗、「宮沢賢治の『がドルフの百合』の心象スケッチ－物理的な空間と精神的な空間－」、『日本学』 第52輯、東国大学校 文化学術院 日本学研究所、2020.
今井重孝、「生きる「拠り所」としての教育思想の可能性」、『近代教育フォーラム』 第6号、History of Educational Thought Society、広島大学、1997.
吉村悠介、「「羅須」からめぐるふたつの須弥山：宮澤賢治「羅須地人協会」命名考」、Annual bulletin of the new humanities(5)、北海学園大学文学研究科、2008.
米地文夫、「「宮沢賢治銀河鉄道の夜の中の異質の挿入部分；プリオシン海岸挿話」 について」、岩手県立大学総合政策学会、Journal of policy studies 12(2)、2011.
田守育啓、「宮沢賢治特有のオノマトペー賢治独特の非慣習的用法ー」、『人文論集』　第46巻、兵庫県立大学神戸学園都市キャンパス学術研究会、2011.
酒井明子、「二つの世界とイノセンスの所在及びその意義ーエンデと賢治を巡ってー」、『横浜商科大学紀要』(7)、横浜商科大学、1991.
中村 元・紀野一義訳註、『般若心経金剛般若経』、岩波文庫、2020.
中村 元外4人編、『仏教辞典』、岩波書店、2002.
坂元兌子、「宮沢賢治研究」、『日本文学』(20)、東京女子大学日文、1963.
黄英、「賢治文学におけるユートピア生成：『旅人のはなし』から、『双子の星』を中心に」、九州大学学術情報リポジトリ9、九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会.
金子民雄、『宮沢賢治と西域幻想』、中央公論社、1994.
猪口弘之、「賢治童話と仏典説話ー＜雁の童子＞渉典メモー」、『国文学　解釈と教材の研究』 27(3), 学灯社、1982.
大室英爾、「宮沢賢治ノートー『ガドルフの百合』についてー」、『駒沢短大国文』(15), 36, 1985.
岡野守也、『金剛般若経全講義』、大法輪閣、2016.

* 이 논문은 2021년 2월 26일에 투고되어,
2021년 3월 15일에 심사위원을 확정하고,
2021년 4월 5일까지 심사하고,
2021년 4월 8일에 게재가 확정되었음.

▌국문초록 ▌

미야자와 겐지의 동화
『네 갈래의 백합(四又の百合)』 "백합"과 "사(四)"의 탐구

박 경 연*

미야자와 겐지 동화의 특징은 비유 표현, 암시, 의외성, 종교, 도덕성 등의 요소를 가지고 있다. 종교학, 철학, 역사학, 광물학, 식물생태학, 천문학, 자연 과학 등 다분야에 걸쳐 광범위한 지식을 기초로 작품이 구성되어 있고, 겐지 특유의 종교 관념은 종교성을 토대로 하고 있다.

본 연구는 일련종의 법화경과 깊은 인연이 있었던 작가인 미야자와 겐지의 동화 『네 갈래의 백합(四又の百合)』의 제목 속에 나타난 "백합"과 "사(四)"에 주목한다. 『네 갈래의 백합』의 등장인물은 여래정변지, 왕과 대신, 마을 사람들, 숲속의 아이가 존재하고 이러한 등장인물 간의 관계성은 작품의 무대 설정을 구분하는데 큰 역할을 하고 있다. 등장인물 간의 관계 속에서 무대 설정은 여래정변지가 있는 장소, 여래정변지를 기다리는 사람들이 있는 장소, 그 사이를 흐르는 강, 아이가 있는 숲속으로 4개의 공간이 있다고 보았다. 더욱이 이 작품에 등장하는 백합의 꽃잎이 네 잎이라는 점에 착안하여 수리적 신비성에 대하여 추구한다. 불교색이 농후한 이 작품을 통하여 작가는 현실의 인간세계에서 불교적 이상세계를 구현하고자 하였으며 이러한 관점에서 "백합"과 "사(四)"의 키워드를 가지고 새로운 각도에서 고찰한다.

다수의 겐지 동화에 나타난 공간구조는 현실과 비현실의 이중구조로 구분된다. 『네 갈래의 백합』의 현실세계는 유형세계와 무형세계로 구분되며, 이는 눈에 보이는 육체의 세계와 눈으로는 보이지 않는 정신세계라고 말할 수 있다. 비현실세계는 공상세계로서 여래가 살고 있는 세계, 어린이가 있는 이(異)공간이다. 현실세계는 여래가 존재하지 않는 세계이고, 강을 경계로 강 건너의 세계는 대조적으로 구분된다. 유형세계 속에서 무형세계와 겹치는 부분은 아이가 등장하는 이(異)공간의 세계이다. 『네 갈래의 백합』의 물리적인 공간은 섬, 성, 강, 숲속 등의 공간이라고 한다면 불교적 존재인 여래의 공간은 다원적인 공간이다. 2차원과 3차원의 세계는 픽션과 논픽션의 세계이다. 2차원의 세계는 공상의 세계로 판타지 등의 가상세계이다. 3차원의 세계는 현실세계이고 인간이나 동물들이 살고 있는 유형세계이다. 4차원의 세계는 인간이 죽어서 가는 사후 세계, 즉 영(靈)의 세계인 무형세계이다. 2차원과 3차원의 세계, 불교적 우주관으로의 4차원의 세계를 복합한 공간구조는 왕이나 마을 사람들이 사는 육지, 경계선인 강, 여래정변지가 있는 육지로 구분된다. 더불어 어린이가 존재하는 숲의 공간이 추가되어 4개의 공간이 된다. 강의 공간설정은 3차원 세계와 4차원 세계를 교차하는 역할을 하고 있다. 『네 갈래의 백합』은 2차원의 가상세계와 3차원의 현실세계 등의 차원적인 관점에

* 단국대학교 자유교양대학 강의전담 교수

의해 물리적인 공간을 나누어 해석할 수 있다. 숲속에서는 이(異)차원의 세계가 존재한다. 숲속이라는 같은 상황에서도 백합을 발견할 수 있는 사람이 있는 반면 발견할 수 없는 사람도 있다. 유형세계와 무형세계가 교차하는 정신적인 공간으로 구별할 수 있다. 작품 속에서 여래가 있는 세계는 일반적으로 사후세계라고 할 수 있는 4차원의 세계이고, 또 인간의 공상에 의한 2차원의 세계이기도 하다. 3차원의 세계는 왕이 있는 세계이고, 그 경계가 강의 세계, 숲속은 3차원 세계 속에서도 이(異)차원의 세계인 것이다.

숲속 맨발의 아이는 현실세계와 사후세계의 경계선의 존재, 또는 사후세계의 존재처럼 상상하게 하고, 맨발의 의미가 사후세계라는 설정은 연구자의 연구와도 연계성을 갖는다. 법화경에 귀의한 겐지는 여래에게 귀의하고자 하는 자신의 모습을 아이를 통하여 투영하고자 설정하고, 백합이 있는 숲속 맨발의 아이가 있는 공간으로 분리한다. 숲은 눈에 보이는 공간과 눈에 보이지 않는 공간이 동시에 존재하는 공간으로 해석한다. 그것은 백합을 발견할 수 있는 가능성의 유무를 통하여 구분할 수 있다.

겐지의 동화는 다양한 비유 표현과 이중구조의 형식을 포함하고 있으므로 겐지 동화의 연구는 다각도에서 조명하고 해석할 수 있다. 겐지 동화의 특징과 종교와의 관련성, 『네 갈래의 백합』의 등장인물 간의 관계성, 겐지의 사상과 『네 갈래의 백합』의 불교의식, 백합의 역할과 위치 설정, 네 갈래라는 단어를 제목으로 선정한 겐지의 의도 등, “백합”에 초점을 두고 작품의 무대 설정에서 보이는 공간구조 “사(四)”에 대하여 연구하였다.

Abstract

An Inquiry into the Words "Four" and "Lily" in Kenji Miyazawa's *The Four-Forked Lily*

Park, Kyoung yeon*

Kenji Miyazawa's fairy tales are characterized by figurative expressions, allusions, unexpectedness, religion, and morality. His works are based on his knowledge of a wide range of fields, including religion, philosophy, history, mineralogy, plant ecology, astronomy, and natural science. Kenji's unique concept toward being religious is based on religion.

This study focuses on 'Lily' and 'Four' from the title 『The Four-Forked Lily』 by Kenji Miyazawa, who is knowledgeable on a series of Buddhist sutras. The characters in 『The Four-Forked Lily』 include Yeoraejeongbyeonji, King and Daishin, villagers, and children in the forest. The relationship between these characters plays a significant role in setting the stage in the fairy tale. There are four locations: the place where Yeoraejeongbyeonji is, the place where people are waiting for Yeoraejeongbyenji, the river running through these two locations, and the forest where the children are. Moreover, by focusing on the lily that has four leaves, he pursues a mathematical mystery. The author is attempting to realize the Buddhist ideal world in the real human world, and with the key words, 'lily' and 'four,' in mind, he explores the world from this richly Buddhism-colored perspective.

The locations shown in many of Kenji's fairy tales are divided into reality and unreality. The real world in『The Four-Forked Lily』is divided into the tangible, visible physical world and the intangible, invisible mental world. The unreal world is a fantasy world, a world where Yeo-rae lives, and a different location where children reside. On the surface, the fairy tale contains one real world, consisting of three groups, and one unreal world. The real world is where Yeo-rae does not exist, and is in contrast with the world across the river. The real-world space overlapping with the intangible world is a different one, where children reside. The physical spaces of 『The Four-Forked Lily』consist of an island, a castle, a river, a forest, etc., while that of the Buddhist existence, Yeo-rae, is a pluralistic space. The two-dimensional and three-dimensional

* Assistant Professor, Dankook University

worlds belong to the world of fiction and non-fiction. The two-dimensional world is a virtual world of fantasy, and the three-dimensional world is a visible, real world where humans reside. The four-dimensional world includes the world of the spirits, the intangible world, where humans exist after death. You can go back and forth between the two-dimensional and the three-dimensional worlds, with the Himukya River located in between. The river intersects the three-dimensional world and the four-dimensional world. 『The Four-Forked Lily』is divided into a two-dimensional virtual world and a three-dimensional real world, physically divided by a river. In the forest, a two-dimensional world, some people may find lilies and others may not under the same circumstance. Space is a mental world. The two-dimensional world, where Yeo-rae resides, the three-dimensional world where the king exists, the river that forms the boundary, and the forest are different worlds.

Barefoot children in the forest remind us of the existence of the boundary between the real world and the afterlife, or the existence of the afterlife. The term “barefoot” signifies the afterlife, as previous research suggests. After embracing Beophwagyeong, Kenji projects himself into a child, and separates the place where the barefoot child and lilies exist. The forest is interpreted as space where both the visible and the invisible worlds coexist. Visibility is determined by the possibility of spotting lilies.

Containing a variety of figurative expressions and double-structured forms, Kenji’s fairy tales can be illuminated and interpreted from multiple angles. This research studies the number four in the spatial structures of the setting: Kenji’s fairy tales and its relevance to religion, the relationship between the characters in 『The Four-Forked Lily』, Kenji’s thoughts and Buddhist consciousness in 『The Four-Forked Lily』, the role and location of the lily, and Kenji’s intention in the use of the term, four-forked.

[Keywords] Lily, forkedness, four, Buddhism, space